

短 報

## 韓国の家族制度

—— R・ジャネリの「祖先祭祀と韓国社会」を参考に ——

竹 並 正 宏

身体障害者療護施設 かわかみ療護園

(平成6年10月19日受理)

The Family System of Korea  
with the Book of (Ancestor Worship and Korean Society)  
Written by R. Janelli

Masahiro TAKENAMI

*Kawakami Rehabilitation Center for the Physically Handicapped  
Kamiotake, Kawakami Town  
Kawakami District, Okayama  
716-02, Japan  
(Accepted Oct. 19, 1994)*

Key words : patriarchal family, religious customs and traditions,  
nuclear family, Confucianism

### はじめに

本論文は、韓国における親族間の形態と内容が産業化及び都市化する過程の中で、親族関係の持続と変化を探ることを目的とする。

朝鮮では17世紀から18世紀の間に父系制と長子相続制の比重が明らかに大きくなり財産はどの子にも等分に受け継がれていたのが、娘の権利は次第に小さくなり、長男は弟妹よりはるかに大きな取り分を与えられるようになった<sup>1)</sup>。

韓国の家族は世代の交代とともに、家長の地位は父から長男へと受け継がれ、家族は長子相続による永代父系直系家族を理想とし、長男が結婚するとその花嫁は夫の家族に加わり夫や両親とともに暮らす。

韓国の親は子供の独立心や自立心を促す必要

を感じてなく、逆に親に頼り、従い、協調することのほうが大切だと考えている。子供は必要に応じてそのつど親にねだる。財産は一家全体のものであり、親はそれを管理しているとはいえず、子供を排除して一人じめにしているわけではない。子供の教育や事業に多額の支出をするのは親としての愛情からばかりでなく、実は見返りも期待してのことである。人生の始まりで子供は親に頼るが、親は逆に晩年を子供に頼る。親は老後の介護や援助だけでなく死後の供養も必要とする。農村の人々にとって、親子等の世代間の経済上や祭祀上の利害関係は一致していて相反するものではない<sup>2)</sup>。

したがって今日の韓国の家族関係は、直系家族制度の基に根づよく内面化されている家夫長の家族制度の基盤と祭祀文化と言えるのではな

いであろうか。

### 韓国の女性の地位

韓国では男の子を持たない母親が男児誕生を切望している様子は一目瞭然である。娘はいずれ嫁に行ってもその家の人間になってしまうだけで、息子に比べて損だと見られ、息子にかかる養育費は将来実を結ぶ投資であるのに対して、娘の養育費は丸損なのである。韓国の女性は結婚によって単に物理的に生家から離れるだけでなく、信義や愛情も一緒に捨てていくというのが通説である。男の子に比べ親に対する依頼心や一心同体の意識も芽生えにくい。

花嫁が実家や血族から別れて夫の側に社会的に移行するプロセスは生涯にわたり、女性は結婚しても夫の姓を名乗ることはなく旧姓のままであるにもかかわらず、実家の家族にとっては結婚によって家を出たよそ者になる。

嫁は第一子を出産すると夫の家族とのつながりが強まり地位も向上する。生まれた子が男児であればなおさらで、一代一家が存続することは確実に受け入れられる。

韓国の農村ではいまだに女性の再婚は不謹慎と考えられている。夫の家族の一員として死ぬことが妻の地位を確保する唯一の道であり、ひいては自分の命日が族譜に記されて末代まで扶養してもらえる道となる。嫁は夫に比べ夫の両親との間に依存心や一体感が芽生えることはほとんどない。夫は両親にとって生まれた時から大切な子供であり、したがって夫と妻とでは身内の目上の人に対する関係がおのずと異なる。このことは祖先祭祀の心理的力学を理解する上で重要な点である。夫婦にとって夫の両親がもっとも身近な祖先祭祀の対象でありながら二人の間にはその接し方に大きな開きがある<sup>3)</sup>。

儒教が長らく文化の基軸であった関係で、男性優位ないし男尊女卑の傾向が日本より韓国の方がかなり強い。一般的な家庭においては男は外で働き、女性は家庭内で家事に専念するというのが基本的な姿勢である。

### 相 続

韓国の伝統的な相続法によると、女性に対し

て血統・家系の継承権をほとんど認めておらず、直系筋・本家筋の家等では、次男分家の長男を後継ぎに迎えるのが一般的だった。次・三男分家の場合でも血統的に可能な限り最も近い男の後継者を選んできている。しかしすべての家々で男の後継者を得ることは不可能な相談で、中には日本の場合のように娘一人を残して婿養子を迎えるということも避けられないことであった。しかし、その際には娘一代きりをもって家系は絶えることとなり、先祖に対して大きな不敬・不興を覚悟しなければならなかった。なぜならば韓国では、結婚後も夫婦とも定位家族の姓をそのまま名乗り、生まれた子供はすべて男性側の姓を名乗るからで、婿養子を迎えた場合女性側の家系は彼女一代で途絶えてしまうことになるからである<sup>4)</sup>。

相続については、現行相続法によれば、財産相続においては被相続人の直系卑属、被相続人の直系尊属、被相続人の兄弟姉妹、被相続人の8親等以内の傍系血縁の順で相続人になることが決められている。ただし同順位の相続人がいる場合は、最近親を先順位とする。また相続分については、同順位の相続人が数人いる時は相続分は同一とする。ただし財産相続が同時に戸主相続をする場合にはその固有の相続分の5割を加算すると定められている<sup>5)</sup>。

現在の韓国では、日本と同じように子供の数が二人か一人になってきており、法律面ですでに民法の大改正が行われてきており、今後の韓国では一代限りの近代的夫婦家族が増えていくと思われる。新しい家族制度・相続法が現実のものとして普及していくまで、しばらくの間はさまざまな困難が予想されるであろう。

### 家内祭祀

家内祭祀では祖先は生きている親として、ただし子供に依存する受け身の親として迎えられ、祭祀慣行には長老に対する振る舞いを規範にしたものが多く、祭祀でも拝礼でも参加者は社会的階層順位をきわめて重視する。命日の祭祀では祖先を生きている長老のように扱う。祖先に食物を供えるという行為は、生きている人間に対して食物を供えるのと同じように重んじ

られている。還暦の祝いは基本的に子が親に食物を捧げることである。韓国の親孝行物語には、子が親の為に食べ物を手に入れるのに苦心する話がとても多い<sup>6)</sup>。

韓国の食卓作法では、飯碗にさじを突き立てるのは最も不作法なことの一つであるが、それは祖先祭祀で飯碗にさじを立てて死者に供えることになっているからである。

親の還暦の祝いの時は、右から左へでなく左から右にナツメ、栗、柿、梨の順に並べられる。生者と死者では祭祀が逆に行われるのは両者の立場が異なっているからだろうと考えられる<sup>7)</sup>。

一般の家々では、元日、清明節、寒食、秋夕、命日等に限って供物を供えることは、それによって一般に拝者と祖霊との交流が開かれるきっかけをつくるものとみられている。

日本人が先祖とは誰かと問われれば個人によってわからないと答えたりいろいろな返答が返ってくるが、韓国人の場合は先祖の概念ははっきりしている。彼等が族譜・支譜・家譜を大切にするのはその為であり、すべての父系単系の死者がすべて先祖なのである。

### 家族関係

朝鮮半島では、父系親族以外の養子縁組みを禁じる法令が交付されたのは李朝初期のことで、明らかに儒教に促されて明の法典を模して作られたものであった。ところが現実には父系親族以外の養子縁組みは17世紀にいたるまでごく普通に行われていた。男性が結婚とともに妻の生家に同居する例もあったようだが、この慣行が李朝初期の家系や家の継承にどのような影響を与えたかは不明である。いずれにせよ養子縁組みのしきたりに変化が起きたのは地方氏族が形成され、今日の韓国全土に行き渡っている長子相続制が確立したのと同じ時期であった。いまでは父系親族以外の養子縁組みは非常に稀となりかつてこのようなしきたりが存在したことさえ知らない人が多い。財産相続、家族の発達周期、氏族の機能と祖先祭祀のしきたりとの関係を見ると、韓国の祖先祭祀に大きな影響を与えてきたのは思想よりむしろ社会組織であった<sup>8)</sup>。

祖先のイメージの男女差は私達の論点を指示

する最も系統だった証拠である。女性の場合祖先についての考えを形成するにあたっては普通実の両親との関係の方が重みを持ち、韓国では儒教思想に基づいて社会が構成されている為、家庭においても長幼の序、男女夕別を基本にした役割分担が明確である。主婦の仕事は、通常の家事、育児の他に、来客の接待、祖先祭祀の供物の準備等に及ぶ。従って主婦は、家庭内での総指揮者としての地位にあり、長男の嫁をもらう時は、その責任に絶えるような女性を慎重に選ぶとさえ言われている。

対外的には父と長男を中心とし、それを内助の功として主婦が支えるというのが韓国の家族関係の典形である。また日本ならば、財布の紐を握っているのは断然主婦が多く、それに次ぐのが世帯主夫婦であるが、韓国の場合は世帯主、父、母、両親を合わせて、妻以外の者が経済的実権を握っているのが多く、これは儒教思想による男性の優位ないし女性差別によるのであろう。あるいは逆に、財布の紐を主婦が握る日本の方が例外的なのかも知れない。

### 核家族化

1956年から1978年にかけて韓国の国民総生産は年平均10%の伸び率を示した。この経済成長はソウルに大きく偏って集中した。むしろ都会に子供が働きに出た方が経済的にも有利な機会に恵まれるので喜んでいる両親も多い。

産業発展は、急速な都市人口の増加をもたらした。長男を中心とする3世代同居が不可能な状態、いわゆる核家族化をひきおこしている。いろいろな意見の中で産業化の過程で核家族化は不可避であるが、たとえ核家族化しても父系血縁を中心とする家族意識は普遍的に残るであろうと言われ、現代の都市生活においては、伝統的なしきたりを維持することは困難になってきているが、それでも冠婚葬祭や祖先の祭りには難れて暮らしていても必ず親元に戻ってくると言われ、産業化によって家族への帰属意識はより強く、族譜の熱心な作成、祖先の墓さがし、盛大な還暦祝い、親族同志の会合等はその顕著な例であり、たとえ別居していても家族の為という意識は今なお強く、核家族化したから今

まで以上に家族とのつながりが強まったという意見が多い。

日本も韓国も今日の核家族化現象の進展の中での平均寿命の急速な伸び、加えて子供の出生率の減少の問題も出てくる。今後の高齢人口の加速度的な増大の中で、この段階の家族をいかに捉え、その問題性をどのように追及するかは、避けることのできない重要な課題である。この課題をいかに解決していくかが、結論的に人間一生の幸、不幸を左右するといっても差し支えないであろう。

### 結 論

韓国では社会の表面上は男女平等が主張されるが、文化の内部にはまだ男児尊重思想が根強く残っている。

従って息子にとって父親は模擬教育の対象であり、また息子にとって父親は、自分を生んでくれた命の恩人として孝をつくすという意識は変わっていない。

親と別居しても血縁のつながりは強く、盆や正月を通しての祖先祭祀は、今でも長男の重要な役割であり、核家族化しても長男が祖先祭祀

を行なう慣習は残っていて、長男だけは意識の上では核家族化してなくそれに伴って家族の機能も変容してきているが、親を扶養する為に長男が金を出すという伝統はくずれてなく、資産相続も一般に長男が一番多く分与を受けるが、個々の取り分はその家の経済状態その他の事情によって大幅に異なる。

しかし最終的には子供全員が両親を守り、息子達全員がなにかしらの責任を年老いた両親に負っているのは、親子両世代が相互に依存しあっている為である。

現代の韓国の家族には、一方で伝統的な父系血縁を維持しようとする動きと他方でアメリカナイズしようとする動きとがある。それは世代、地域、学歴、職業によっても異なるであろうし、いずれの場合も個人の帰属意識を最終的に受け止める集団は家族しかいないことは確かである。

韓国人自らが、東方礼儀の国を自負していて、世界で最も儒教的であるといわれている韓国において、今後の社会変化の中で、家族のもつ責任をどこに位置づけていくか、韓国の家族を考えていくうえで大きな課題となるであろう。

### 文 献

- 1) R・ジャネリ、任敦姫（1993）祖先祭祀と韓国社会、第一書房、pp13.
- 2) 同掲書、pp48—49.
- 3) 同掲書、pp58—59.
- 4) 桧垣 功（1988）慶南・統営群における祖先崇拜、日韓合同学術調査報告、pp259.
- 5) 韓国民事法務研究会（1985）韓国親族法・相続法、韓国通信社、pp126.
- 6) R・ジャネリ、任敦姫（1993）祖先祭祀と韓国社会、第一書房、pp135—147.
- 7) 同掲書、pp141—142.
- 8) 同掲書、pp276—278.